

石狩川下流幌向地区における湿原再生に向けた取り組み

○新庄久尚 (株式会社エコテック)・松本洋光 (北海道開発局札幌開発建設部江別河川事務所)・小本智幸 (株式会社ドーコン)・坂元直人 (株式会社エコテック)・古西力 (株式会社ドーコン)・矢部和夫 (札幌市立大学)

h-shinsho@ecotech.ne.jp

1.石狩川下流域での湿原再生に向けた背景

北海道の石狩川下流域にはかつて総面積約 55,000 ha となる日本最大のボグ(≡高層湿原植生)が広がっていた。石狩川下流域の湿原は石狩川およびその支川により区分された幌向原野、篠津原野、美唄原野など複数の泥炭地の集合体であり、湿原生のスゲ属やミズゴケ属などが優占する広大なボグを形成していた。しかし、その後の明治以降の開発により、石狩川下流域では 1910 年代までにフェン(≡低層湿原植生)が消失、1950～1960 年代の農地開発や治水事業に伴いボグもほぼ消滅し、1983 年には石狩平野に残存する湿原植生は訳 119 ha とかつての 0.2%にまで激減した。現在では美唄湿原や月ヶ湖湿原など、孤立したわずかな湿原植生が残るのみとなっており、これらの残存する湿原も地下水位の低下等による乾燥化が進行するなど、今後の存続が危ぶまれている。

石狩川下流の治水事業の一環として夕張川の流れを切り替えるため、幌向原野を開削し 1936 年に通水した『夕張川新河道』では、高水敷地表面に泥炭層が露出する箇所が残されており、泥炭採取地として活用されてきた。北海道開発局札幌開発建設部江別河川事務所では、この泥炭採取跡地にかつての湿原植生が残されていることに着目し、その生育環境を把握する環境調査を 2010 年から実施してきた。またこの確認を受け、国土交通省北海道開発局札幌開発建設部は 2014 年 1 月に『石狩川下流自然再生計画書』を改定し、当該区域を『石狩川下流幌向地区』として自然再生事業の対象地域に指定している。2016 年には表層地下水位の安定化を図る対策工事が実施され、流域住民や泥炭採取業者などとの連携のもと、かつて幌向地区に形成されていたボグの再生を目指している。

2.泥炭採取跡地での湿原植生再生の推移

2010 年から開始したモニタリングの結果、泥炭採取跡地のうち表層地下水位の年変動が安定している箇所において、流域で確認が途絶えていたホロムイクグ、エゾサワスゲ、ミカヅキグサなどの湿原植物が自然再生していることを確認したほか、ボグの指標となるミズゴケ属が一部に残存していたことも明らかとなっている。

昨年 2016 年に実施した遮水壁整備後、試験区域では表層地下水位の上昇と安定化が見られたほか、表層地下水の水素イオン濃度(pH)と電気伝導率(EC)についても目標とするボグの再生に適した条件への改善を確認している。本報告ではこれらの整備結果のほか、今後のボグの再生に向けて計画している検討内容について報告する。



ボグ再生に向けた遮水整備状況

キーワード：ボグ、フェン、泥炭、湿原、自然再生